五〇九七（次行）

［覆載の經緯］蓋し宇宙は精を以て没す、
天地は麁を以て露す、

五〇九八　天は動止の機を畜う、

五〇九九　地は虚實の體を有す、

五一〇〇　天は虚と雖も而も動を以て其の體を剛にす。

五一〇一　何ぞ地の實を以て其の體を堅くにするに異ならん。故に

五一〇二　麁露の天地は。堅ならざれば則ち剛なり。故に

五一〇三　地の物を立つると、

五一〇四　天の物を浮ぶると、堅剛は同一なり。

五一〇五−〇六　剛處は、日影の象之を占む、

五一〇七　堅處は、水燥の物之を占む、是に於て

五一〇八　象質は天地を隔てて居る、

五一〇九　歳運は轉持を分ちて行く、

五一一〇　象と質と各其の氣を得て配す。

五一一一　氣象は時節を紀すの物を爲す、

五一一二　氣質は生化を爲すの物を爲す、故に

五一一三　虚動は、經具なり、

五一一四　實靜は、緯具なり、

五一一五

五一一六　實靜は天地を成す、而して
五一一七　虛動は轉持を成す、
五一一八　轉中は、則ち萬象運轉す、期は往復循環に在り、
五一一九　持中は、則ち萬質相い換る、期は生化鱗比に在り、故に
五一二〇　轉物は常に一體を持す、
五一二一　持物は毎に其の體を換う、
五一二二　大物は小物を容る、
五一二三　有窮は無窮に居る、
五一二四　小物なる者は有窮なり、體體相い換る、引きて之を無窮に致す、
五一二五　大物なる者は無窮なり、其の體を常に持す、生化は一體なり、
五一二六　生化一體なる者は、生化すと雖も、而も其の跡を露せず、故に無窮と曰う、
五一二七　體體相い換る者は、亦た無窮を致すと雖も、
五一二八　前體は後體に非ざるを以て、生化の跡は顯なり、故に有窮と曰う、
五一二九　前體は後體と一なれば、則ち生化は其の中に行わる、而して其の物は無窮の若し、
五一三〇　前體は後體と別なれば、則ち彼は化し此は生す、而して其の物は有窮の若し、
五一三一　無窮なる者は、終りて始まる、
五一三二　有窮なる者は、始まりて終る、
五一三三　其の道を同せずと雖も。而れども生化の通に於ては。則ち一なり。
五一三四　人なる者は。麁物なり。小體なり。

(PB 371)

(I 435b)

五一三五　身は畫する所有り、
五一三六　生は盡きる所有り、
五一三七　盡きる有るの生を以て、
五一三八　畫する所の身を有す、
五一三九　混成を以て。其の智は囿する所有り。
五一四〇　麁小を以て精大を推す。大物に窒す、
五一四一　長期に眩む、而して
五一四二　蓋し萬物は大物に居る、
五一四三　衆期は長期に従う、
五一四四*−四五　地は、塊焉たる一圓物なり、故に下は能く上を爲す、西は能く東を爲す、
五一四六　時は氣を以て通ず、
五一四七　處は體を以て塞る、
五一四八　塞中、天は動き地は靜る、
五一四九　通中、事は移り物は住す、
五一五〇　住する者は止に定まる、
五一五一　移る者は行に通ず、
五一五二　中なる者は、止の主、物は之に居る、位は之に立つ、
五一五三　今なる者は、移の主、事は此に行わる、物は此に換る、
五一五四　事は此に行わる、

(PB 372)

五一五五　物は此に換わる、
五一五六　中は、立ちて移らず、
五一五七　今は、移りて居らず、
五一五八　立つ者は、中外に位有り、
五一五九　移る者は、來去に方無し、
五一六〇　氣質は坱中に物す、
五一六一　氣象は衰中に跡す、
五一六二　氣質は物ならざれば、則ち焉んぞ處を露するを得ん、
五一六三　氣象は跡ならざれば、則ち焉んぞ時を紀するを得ん、
五一六四　氣は西し象は東す、動を以て時の紀を成す、
五一六五　天は外し地は中す、靜を以て處の位を立つ、
五一六六　坱坱の立にては、中は破る可からず、而して外は邊無し、
五一六七　體は一なりと雖も、而も一面一背の二用有り、
五一六八　衰衰の移にては、今は剖く可からず、而して時は界無し、
五一六九　行は一なりと雖も、而も一往一來の二跡有り、
五一七〇　圓中は一心を點して、外は際涯無し、
五一七一　直中は一頃を見して、外は前後を隠す、
五一七二　中なるや、南に中す、
五一七三　北に中す、

五一七四　西に中す、
五一七五　東に中す、
五一七六　無際涯に中して、　而して能く移動する者を維す、
五一七七　今なるや　前に今す、
五一七八　後に今す、
五一七九　去るを積みて後を厚くせず、
五一八〇　來るを奪いて前を薄くせず、　而して能く靜立する者を移す、
五一八一*ー八二　時は、　悠焉たる一直氣、前を轉じて後と爲す、　生を收めて化と爲す、
五一八三*ー八四　彼の水車を觀るに。一邊は水を載せ、　仰ぎて來る、
五一八五　一邊は水を瀉し、　俯して往く、
五一八六*　水車は有體の往來なり、　猶お且つ端を見ず、
五一八七ー九〇　（編集による空白）
五一九一　前後なる者は、　無象の往來なり、
五一九二　孰れか逆えて其の首を見ん、
五一九三　孰れか將って其の尾を見ん、　蓋し
五一九四　時なる者は、　往來を以って前後と爲す者なり、
五一九五　期なる者は、　生化に由りて始終と爲す者なり、
五一九六　時に往來有り、　物は當りて前後を分つ、
五一九七　期に始終有り、　時は移りて新故を成す、　是を以て

(I 436a)

五一九八　天地に前後有り、
五一九九　萬物に新故有り、
五二〇〇　人は始終新舊の質を以て。駸駸たる者を追う。
五二〇一　是に於て。將迎の間。智の畫する所有り。
五二〇二　以て疑いを天地に爲す。今を以て故を觀れば。則ち鴻濛たり。
五二〇三−〇四　後を以て今を觀れば。則ち今は胡ぞ鴻濛たらざらんや。
五二〇五　既往將來は、典籍の傳る所、事跡の推す所を除く、而して智の至らざる所なり、
五二〇六　四方上下は、見聞の及ぶ所、思慮の至る所を除く、而して智の至らざる所なり、
五二〇七　塞がる所に於て。而して強いて之を通ぜんと欲す。故に
五二〇八　其の知る所は愈いよ廣くして、而して其の知らざる所は愈いよ遠し、
五二〇九　其の知る所は愈いよ皦にして、而して其の知らざる所は愈いよ曖し、
五二一〇　混混たる者をして粲粲たらしめんと欲す、
五二一一　粲粲たる者をして混混たらしめんと欲す。
五二一二　理を誣るに非ざれば。則ち自から蔽うなり。
五二一三　過ぐれば　則ち後なり、
五二一四　及ばざれば則ち前なり、
五二一五　天は此の間に往來す、
五二一六　物は此の間に生化す、
五二一七　知運感應の爲す所、

(PB 373)

五二一八　當遇會違の成る所、
五二一九　人に於ては。則ち治亂興廢。酬醋黜陟。皆な此に於てす。
五二二〇　我は此に生化し。自から此に起滅す。
五二二一　無際の有際を容れ、有窮の無窮に通ずるを知らず、
五二二二　此の無窮を有窮に於て窮めんとするは。難し。